

化学教育 徒然草

若き力



ABE Masaaki

阿部 正明

兵庫県立大学大学院物質理学研究科 教授

巻頭言

中国のある地方都市を訪問している。かつて研究室で共に研究した博士研究員が当地で大学教授となっており、その大学での講演を頼まれたためである。初めて訪問する都市であったこともあり、どのような街だろうと不安を胸にしながらの出国であったが、着いてみてその洗練された大都会ぶりに驚いた。翌日の講演会では、大講義室は学生・大学院生で埋め尽くされ、久しぶりの若い熱気に少々気押されながらのスタートだった。食いつくような視線、一挙手一投足を注目されながらの講演はやり甲斐がある。あっという間と感じた講演の後、質問攻めにあった。手ごわい。遠慮と躊躇から日本では普段耳にしないようなストレートな質問に面食らった。アジア諸国の学会でよく思うことだが、このひたむきな熱気はどこから生まれるのだろうか。かつての日本もこうであったのか。

4月、大学新1年生向けオムニバス講義の一回を担当した。この時も上に述べた感覚に近いものが確かにあった。講義後ひとりの学生は、所属していた高校科学部の顧問教師が以前出した有機分子の連結数の記録(?)を抜きたい、講義を聴いて金属錯体でも同じような合成研究が目指せるとは知らなかった、と目を輝かせて夢を語ってくれた。

現代日本の十代・二十代の活躍、特にスポーツ・芸術・芸能分野での活躍と国際貢献は感動的ですからある。一方「理科離れ」が語られて久しいが、小中高生を指導される先生方のご努力により、科学技術の若き担い手は確実に育っている。そうした人材を、研究を通しうまく社会とリンクさせられるか、大学人の肩にかかっている。昨今、教育・研究プログラムの絶え間ない波の中で、教員も学生も皆忙しい。アジア諸国の大学はどうであろうか。研究施設や人材は揃ってきたが、国や地域で差はあるものの十分でないところは随所にまだある。未知を知りたい、得たい、作りたいという欲望と飢餓感、それらが彼らの強みになっているのだろう。飽食感の強い我が国において、飢餓に根ざす熱意の醸成はいったい可能であろうか。素朴な好奇心、未知を追う熱意、躊躇なしに意見する力、これらを大切なことともう一度意識し、学生と向き合う必要があるようだ。春のできごとに、自戒を込めそんなことを想った。

明日は次の訪問地に向かう。どんな若き力にそこでは会えるだろうか。大いに楽しみである。

[連絡先]

678-1297 兵庫県赤穂郡上郡町光都 3-2-1 (勤務先)